福岡教育大学大学院教職実践専攻年報　第11号　165-172（2021）

［研究論文］

子供の学校適応を促進する学級活動(1)の研究
－子供に任せる活動の充実を通して－

The Study of Class Activities (1) to Promote School Adaptation of Children
-Through Guidance on Three Domains of "Class-Building" -Based Class Management—

柳　井　文　陽
Fumiaki YANAI

脇　田　哲　郎
Tetsurou WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
川崎町立川崎東小学校

福岡教育大学教職実践ユニット

（2021 年１月 29 日受理）

本研究は，「荒れ」た学級を立て直すことを目指し，白松(2014)が示した「学級経営の３領域」の指導を充実させた学級経営を行うことで，子供たちの学校適応促進への影響を検討した。研究では，領域１「必然的領域」と領域２「『条件整備型』学級経営領域」の「教師の揃える指導」と，領域３「『学級づくり型』学級経営領域」の「子供に任せる活動」を，昨年度特に「荒れ」が深刻だった第５学年において実施した。その結果，学級のけんかやもめごとの数値が有意に下降した他，「困ったことは話合いで解決」「他の当番や係を助けた」「何でも言える」の項目について，数値が有意に上昇していた。これを裏付ける児童の感想などの質的な評価からも子供たちの学校適応が促進したと考えられる。このことから，「学級経営の３領域」の指導を充実させた学級経営を行うことは，子供たちの学校適応促進に有効な手立てであることが示唆された。

キーワード：学級活動(1)，「学級づくり」型学級経営の３領域，学級経営，学校適応，荒れ

1　問題と目的

ここ 20 年来，学級崩壊やいじめ，不登校，小１プロブレム，中１ギャップなど，学級・学校に関わる社会問題の報道が後を絶たない。平成 30 年度「児童生徒問題行動調査：文部科学省」によれば，暴力行為が学校の管理下で発生した学校数は 12,417 校（前年度 11,250 校），全学校数に占める割合は 35.0%（前年度 31.6%）であった。また，いじめを認知した学校数は 30,049 校（前年度 27,822 校），全学校数に占める割合は 80.8%（前年度 74.4%）であった。暴力行為・いじめの認知件数いずれも増加していることから，全国的にも児童生徒が落ち着いて学校生活を送ることができるような教育活動の充実が求められていると考える。

また，学校では，近年の大量退職に伴い，若年層教員の割合が大きく増加している。平成 28 年度「学校教員統計調査：文部科学省」によれば，公立小学校における 30 歳未満の本務教員数の割合が，平成 16 年度から平成 28 年度にかけて，およそ２倍に増えている。このため，学校現場では，子供たちの様々な問題を解決することができず，学級が荒れ，学級崩壊に悩む教員が増えている。

在籍校においても，若年教員の学級を中心に，授業が成立しないなどの状況が学校全体で見られた。（７月 22 日校内生徒指導委員会報告より）

在籍校は，通常学級在籍児童数 186 名，特別支援学級在籍児童数９名，計 195 名からなる。在籍校の子供たちは，明るく元気で素直な反面，言動が粗野な子供も見られ学校が「荒れ」に向かう傾向にある。昨年度の校務運営委員会の報告によれば，以下（表１）のような学校の「荒れ」についての課題が挙げ

表１　校務運営委員会の報告

・けんかやトラブルの多さ ・教師による指示が通らない（授業が成り立たない） ・給食指導・掃除指導のときにトラブルが頻繁に発生 ・特定の子へのいやがらせによる不登校 ・特定の子の教師への反発 ・職員室に助けを求めるインターホンが毎日鳴る（６月） ・教師５人係で対応した学級もあった ・学校の電話代（トラブルの報告による）が上限 ・給食の残食率は，６月が最も多く８．3%（町平均３．6%） ※平田（2019）で，子供の偏食傾向と学校生活満足度に相関があることが示されている。

られた。

担任にインタビュー調査をしたところ，若年層教員を初め，ほとんどの教師が，「落ち着かない子供たちをどのように指導すればいいか分からない。」という悩みを話していた。また，子供のよさや頑張りを「ほめて」育てたいという思いはあるものの，「子供の問題行動が目立つため，どうしても叱る指導が中心になり，うまくほめることができない。」や「指導がうまくいかないことが続くあまり，無力感を感じている。」と悩む教師も見られた。このように学級経営に悩む教師が増えている背景に，下村・天笠・成田(1994)は，「どのように学級経営をすればよいかイメージがつかみにくい。」という問題を指摘している。

そこで，このような荒れた状況の子供たちを「安定」した状態へと向かわせる学級経営のあり方を究明し，在籍校の教育課題の解決に貢献するとともに，昨今，問題になっている「学校・学級崩壊」の改善にも役立てていきたいと考えた。

主題に示した「子供の学校適応を促進する学級活動(1)」とは，小学校学習指導要領解説特別活動編（平成 29 年告示）に示された自発的・自治的な学級活動(1)(以下，学活(1))を通して，「荒れ」た学級の子供たちが，安定した状態で学校生活を送ることができるようにするということである。

副題に示した「子供に任せる活動」とは，図１に示す，白松（2014）が示した領域３「『学級づくり型』学級経営領域」のことであり，学活(1)の活動形態である「学級会」と呼ばれることの多い話合い活動や係活動，学級集会などの活動を自発的・自治的な活動にするということである。つまり，子供たちが自ら問題を発見し，問題解決のために話し合い，話し合ったことを友達と協力して実践する活動の場や時間を十分に保障するということである。この学級経営の３領域は，白松がこれまでの日本の学級経営に関する課題を整理し，統合したものである。具体的には，教師の揃える指導を行う，領域１「必然的領域」と領域２「『条件整備』型学級経営領域」

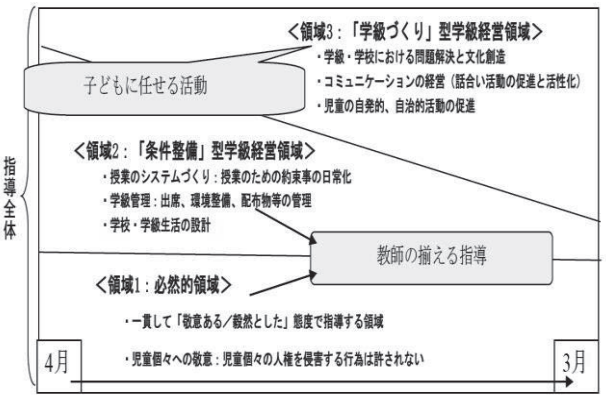

図１　「学級づくり」型学級経営の３領域（白松, 2014）

の２領域と，子供に任せる学級活動を行う，領域３「『学級づくり』型学級経営領域」からなる。

荒れた学校を建て直した脇田(2014)の研究では，特別活動を中心にした学校経営を行う際に，基盤作りとして「教師の揃える指導」を行っており，このことは領域１・領域２の内容と関連が深い。「子供に任せる活動」を中心にした学級経営を行うには，それ以前に，子供たちが規律ある正しい生活をできるようにするという基盤ができていなければならないということが大切であると，脇田は述べている。

しかし，教師による一方的な指導だけでは，子どもたちの学校適応を促進する学級経営は実現できない。太田（2001）は，教師による管理が強すぎる学級では，学級崩壊が起きやすいことを指摘している。狩野・田﨑（1990）は，学級のいろいろな問題を学級の児童・生徒自らの力で解決できるように取り組ませることによって学級の自己教育力が高められ良い学級が作られることや，教師が児童・生徒と共に良い学級を形成するには，特別活動の活用がひとつのカギとなると述べている。

このことから，学級経営の中心に「子供に任せる活動」である領域３「『学級づくり』型学級経営領域」を位置付け運用していくことは，学校適応を促進していくうえで重要であると考える。小学校学習指導要領（平成 29 年告示）に示された「自発的・自治的活動を中心にした学級経営の充実」がまさにこのことを示していると考える。在籍校のように学校不適応が見られた学校では，教師が子供を信じ，任せ，認めるという温かい指導観が重要になってくると考える。

本研究では，「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を充実させることにより，学級の「荒れ」が「安定」へ向かい，子供たちの学校適応が促進されるであろうとの見通しを立て実践し，その効果を検証する。

2　研究

（1）教師の揃える指導の充実

①目的

図１の示す，「教師の揃える指導」（領域１・２）を充実させ，子供たちが規律ある正しい生活をできるようにするという基盤づくりを行う。

②期間　202X 年６月～202X 年 12 月

③対象　在籍校５年 X 組児童（16 名）

④測定内容と測定方法

・学校環境適応感尺度 ASSESS（栗原・井上 2017）
・担任や報告者による子供たちの観察
・担任外教師（管理職や生徒指導担当）による観察結果

⑤実施内容

荒れた学校を建て直した脇田(2014)の研究では，特別活動を中心にした学校経営を行う際に，基盤作りとして「教師の揃える指導」を学校全体で行っている。これを参考に，在籍校でも，校内での教師の指導について「何を」「どのように」「どの程度」揃えるかについて決めた。

まず，校内研修の時間を活用して，「教師の揃える指導」について，どの内容を全職員で共有化して徹底するかを決定し整理した。具体的な指導内容は表２の通りである。推進組織として，校務運営のための中心組織である校務運営委員会を中心とした体制作りを行った。また，１学期の始業式の日に校長と教務主任が子供たちに取組の内容を伝え，その後各学級で担任が子供たちに取組の説明を行った。それ以降は，生徒指導担当教員が中心となって，月に１度，生徒指導週間を設け，表１の内容の中から重点目標を決め徹底をした。

５年 X 組の担任は，取組を徹底して行ったことで開始から１週間程度で，昨年よりも明らかに学級が落ち着いていると生徒指導委員会で報告されていた。取組では，校内放送や表彰，学校・学級便りを通して X 組の子供たちの頑張りを，校長や教務主任，担任が積極的に評価を行いながら推進した。

表２　全教師が共通して指導した内容（川崎東小）

・人権的な問題には毅然として指導する。
・時間→チャイムと同時に授業開始・終了の徹底，教師も時間を必ず守る。
・整頓→棚の上に何も置かない。
　机をおくところに全員で印を打つ。
・給食→①　当番の「ならんでください」の指示のもと，着替えて，廊下にならんで，そろったら出発。
　②　給食室に入るとき（〇年〇組入ります），もらって教室に帰る。その間，教室の子供たちは，机を班ごとにつくり，ふきんでふかせる。終わったらみんなは座って待つ。
　③　配膳をとりに行く。教室に座って待つ。
・そうじ→默動そうじを全校で。
　①　休み時間の終了の合図にオルゴールを鳴らす。
　②　全員掃除区域へ掃除道具を持って行き，座る。
　③　「黙想（２０秒）→黙想やめ→起立→気をつけ→礼
　④　默動中は，先生も黙ってそうじする。
　⑤　オルゴールが流れたら教室の後ろに座る。「起立→気をつけ→礼」
・全校朝会→全員並んで静かに，体育館へ。
　①　８時１５分になるとろうかに静かに並びだまって体育館へ行く。
　②　起立→気をつけ→礼→「おはようございます。」（礼１・２・３）
　③　校長先生のお話を聞く。「今日は〇〇を頑張りましょう」
　④　起立→一年生から教室へ戻る。
・言葉遣い→教師が見本となる言葉遣いをする。
・指導と評価の一体化→指導したらほめる。
　※叱ってばかりの指導にならないようにする

⑥結果と考察

「教師の揃える指導」を行った結果，５年 X 組が落ち着きを見せてきた。当学級は，前年度授業中に否定的な声掛けをしてトラブルに発展し，授業が成立しない状況が度々みられていたが，今年度はそのような状況は全く見られない。学校環境適応感尺度 ASSESS（以下，アセス）の調査結果では，非侵害的関係の値が，令和２年６月の 64 に対し，令和２年度 12 月には 72 へと上昇した（図２）。また，授業が成立するようになったことで，学習状況も良好になっていると考えられる。アセスの学習的適応の数値が，令和２年度６月の 50 に対し，令和２年度 12 月には 53 へとわずかに上昇している（図３）。これを裏付ける結果として，管理職や担任，生徒指導委員会報告においても，５年 X 組に落ち着きが見られているという報告があった。

このような効果が見られるようになったのは，担任が，基本的な生活習慣の形成や学習，生活への規範遵守に関する指導を統一して行ったことで，そのことが，当学級の子供たちにも同じ内容で偏りなく指導されることとなり効果が見られたのではないかと考える。また，人権的な問題に毅然とした指導が行われていることが，子供たちの安心・安全につながり，学級の落ち着きにつながっていると考えられる。このことは，白松(2014)が，「学級経営の基盤として，自己と他者の人格を傷つける言動・行為は許さないという教師による指導の徹底が，自己と他者の人格を尊重する言動・行動を増やす。」と述べていることと関連が深い。

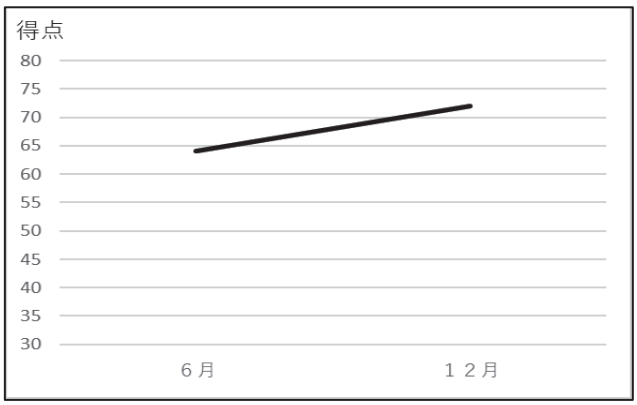

図２　ASSESS 非侵害的関係の比較

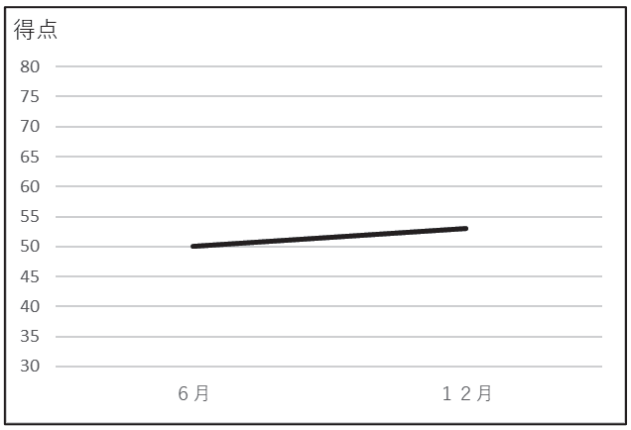

図３　ASSESS 学習的適応の比較

しかし，太田（2001）が示しているように，教師による一方的な指導だけでは，子どもたちの学校適応を促進する学級経営は実現できない。令和元年度生徒指導委員会報告によれば，在籍校では，教師が厳しく指導して子供を押さえつけようとしてしまい，かえって子供の反発が強くなり学級崩壊に至っケースも報告された。実際に担任からは，「授業は成立するようになったが，子供同士の関係のこじれは依然として変わっていない」という報告もあった。

そこで，以下に示した「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」を実践し，学校適応促進の効果を検証することとした。

（２）学活(1)を中心とした子供に任せる活動

①目的

図１の示す「学活(1)を中心とした子供に任せる活動」(領域３）を実践し，学校適応促進の効果を検証する。

②期間　202X 年４月～202X 年 12 月

③対象　在籍校５年 X 組児童（16 名）

本学級は昨年度「荒れ」指導が通らなかったり人間関係上のトラブルが多く見られたりしたことから，管理職と検討の上介入することに決定した。

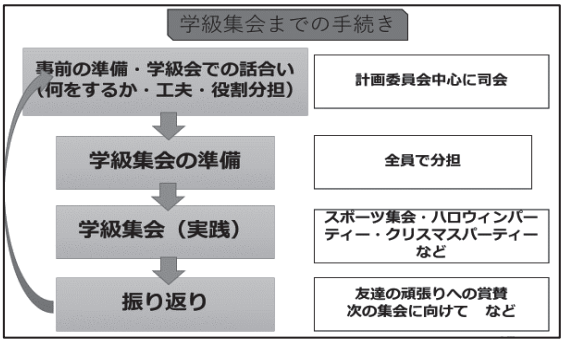

図４　特活解説書 P45 に示されている学習過程を参考に報告者がまとめた学習過程

④測定内容と測定方法

・学校環境適応感尺度 ASSESS（栗原・井上，2010）
・小学校生活に関する調査（長谷川・太田・白松・久保田，2013）
・担任や担任外教師（管理職や生徒指導担当）による子供たちの観察報告
・各活動後の子供の振り返り

⑤実施内容

・特別活動全体計画と年間指導計画の作成
・学活(1)における話合い活動，学級集会活動の充実（報告者によるコンサルテーション）
・担任が活用できる学級活動デジタルコンテンツの活用（脇田ら，2020）

⑥研究を行うための条件整備

（ア）推進体制について

担任は，教職経験 17 年目の中堅教員で，研究主任を担当しているミドルリーダー的教員である。担任は指導力の高い教師であるが，指導が強すぎることにより一部の子供との関係作りに悩みを抱えていることを報告者に話していた。また，子供に任せる学活(1)に取り組み，学級経営を充実させたいという思いも語ってくれた。そこで，学活(1)の指導について，報告者が小学校学習指導要領解説特別活動編（平成 29 年告示）（以下，特活解説書）P45 に示されている学習過程に沿って（図４），担任にコンサルテーションを行いながら支援することとした。

１学期は，学活(1)における自発的，自治的活動である話合い活動を中心に報告者（特別活動主任補佐）が授業を行ったり担任にコンサルテーションを行ったりしながら推進した。また，昨年まで子供に任せる学活(1)の経験が不十分であったことから，秋山(2014)の３段階学級集団形成モデル（表３）を参考に，１学期は第１・第２ステップの指導を想定したコンサルテーションを行った。

２学期からは，活動をできるだけ子供に任せて行

表３　３段階学級集団形成モデル（秋山，2014）

第１ステップ	教師主導期	教師が主導しながら、児童に望ましい集団活動を体験させる時期
第２ステップ	児童の自主的活動への移行期	児童の多くが集団活動に慣れ、自主的に活動を進めることができるようになる時期
第３ステップ	児童の自主的活動期	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取組を計画・実践することができる時期

う第３ステップの指導を想定したコンサルテーションを行った。また，学級活動デジタルコンテンツを担任自ら活用して授業実践をしてもらい，報告者はできるだけ担任に任せるようにした。

（イ）学級活動の年間指導計画の作成

学級活動の年間指導計画では，「子供に任せる活動」としての学活(1)を通して，１学期から３学期に向け学級の人間関係が徐々に高まるように表３を参考にしながら，予想される議題を担任が整理し作成した。その際に，学級活動担当教員や報告者も作成協力を行った。また，報告者は職員会議後にミニ研修会を行い，子供たち同士がお互いの「よさ」や「頑張り」を認め合えるようにする学活(1)の充実を通して，在籍校の教育課題である子供たちの人間関係をよりよくしていくことを担任が意識できるように働きかけた。担任は，年間指導計画に基づいて計画的に指導を行った。

（ウ）学級会のための環境づくり

４・５月に，子供たちが学級会を行う上で活用できる学級活動グッズ（司会進行表・黒板用マグネット等）を，報告者を中心に特別活動部で，全学級分整備を行った。

（エ）学級会プランニングシート（脇田，2018）の活用

報告者による担任へのコンサルテーションを行う際に「学級会プランニングシート」を活用しながら行った。このプランニングシートは，「人間関係上の諸問題を，子供たちが議題化して学級会で話合い，解決方法をみんなで役割分担して実践する，学活(1)の一連の活動に取り組めるようにするために，担任が見通しを持ち子供たちに指導できる構想シート」のことである。

（オ）計画委員会活動計画表の活用

子供たちが自分たちで学級の諸問題について話合う学級会を行うためには，話合いをコーディネートする司会や書記などといった計画委員会を組織する必要がある。学級会での議題が決まると，話合いの計画を立てるために，計画委員会の子供たちは，以下のような学級活動計画表を活用しながら打ち合わせをした。担任は，計画委員会の打ち合わせに必ず参加し，必要に応じて指導・助言・取組の評価を行った。

（３）研究の実際

①オリエンテーションの実施（表３の第１ステップ）

５年Ｘ組では，昨年度学活(1)を子どもに任せる形で実施できていない学級であったので，担任と打ち合わせの上，報告者が主導して，学級活動の時間の目的，内容，遊びの体験，計画委員会の組織の説明を行う学級活動オリエンテーションを行った。

オリエンテーションが終了した時点で，経験の少ない子供たちから議題の提案が難しいことに配慮し，年間指導計画を踏まえながら担任と打ち合わせを行い，第１・２回の学級会の議題は，「学級目標決め」や「係活動決め」に決定した。第２回学級会が終了した時点で，議題ボックスを設置し，話合ってほしいことを募集した。その結果，第３回学級会では「全員で仲良く遊びたい」という内容が提案され，議題が決定した。

②第３回学級会の実施（表３の第２ステップ）

令和２年６月１８日（木）　５限

議題：**「みんなで遊びを決めよう」**

提案理由：このお楽しみ会で絆を深めて（仲の良い・思いやりのある・助け合う）クラスにして，高学年として見られるクラスにしたいから。

話合うこと：①何のゲームをするか

役割：司会：副司会・ノート記録・黒板記録は，すべて子供（必要に応じて，教師がモデルを示す）

決まったこと①フルーツバスケット
ハンカチ落とし

（ア）事前の活動

計画委員会の子供たちに報告者が学級会をどのように進めるかをレクチャーし，担任にもその場面を見てもらいながら進めた。初めは，報告者の指示が出るまで子供たちは自分たちでやろうという動きは見られなかったが，「このお楽しみ会は成功させたい？」「そのためにはどんなことをすればいい？」と活動全体の見通しが持てるように働きかけをすると，少しずつ自分達で準備を進めようとしたりする姿が見られてきた。休み時間には，子供たちだけで学級会のリハーサルを頑張っていた。報告者や担任は，その場面を積極的に評価した。

(イ)学級会での話合い

司会進行を初めて子供たちに任せて行った。緊張をしていたが，前の人に意見をつなげながら発言することが出来ていた。計画委員会の子供たちも一生懸命進行や黒板記録・ノート記録を協力しながら頑張っていた。担任は，計画委員会の後方から積極的に助言を行った。途中，黒板が追いついてないと司会や担任が話を止めて，待ったり，足りないところはアドバイスをし合ったりしながら進めていた。

(ウ)学級集会の実践と振り返り

学級会で決まったことは，翌日の朝の会で全員で役割分担をした。分担では，子供たちだけで集会を進めるための司会進行役も決定した。本番までは，子供たちで集会の準備に取組める時間を確保した。集会本番では，最初から最後まで，全て子供たち主導で進めることが出来た。終末の，お互いの頑張りやよさを褒めあう場面では，お互いに称賛し合う子供たちの姿が見られた。また，集会後に，担任と報告者が，取組への頑張りを評価した。

担任との振り返りでは，第２ステップ（表３）の学活(1)ができてきていることへの評価と，今後活動を継続し，２学期から第３ステップの段階の学活(1)の実践につなげていくことを確認した。

②第７回学級会の実施（表３の第３ステップ）

令和２年 10 月２日（木）　５限

議題：**「ドッジボール大会をしよう」**

提案理由：このゲームを通して，友達との絆を深めて楽しくけんかのないゲームにしたいから。

話合うこと：①原案について話合う
②役割分担

役割：司会：副司会・ノート記録・黒板記録は，すべて子供

決まったこと①ドッジボール大会プログラム
ドッジボール大会のルール
②役割分担

(ア)事前の活動

今回の議題は，子どもたちが議題ポストに提案したものを，計画委員会がとりあげ，学級全体で次回の学級会の議題として決定した。

事前の準備では，ほぼ子供たちだけで進めることができていたので，担任と報告者は，計画委員会を後方から見守り，最後に取組の評価を行った。その後も，子供たちは自主的に自分たちで昼休みなどにリハーサルをしていた。

(イ)学級会での話合い

学級会本番は。教師の助言がほとんどなくてもはじめから最後まで子どもたちが中心となって運営し，話合いを進めることができた。フロアーの子供たちも，他の友達の意見につないで発言したり，友達の意見に「いいね」などと反応したりする様子も見られた。担任は，終末の教師の話で学級会の評価を行った。

(ウ)学級集会の実践と振り返り

ドッジボール大会の，司会進行・はじめの言葉・おわりの言葉・めあて・飾り付け・プログラム作成・プレゼント（メダルづくり）・招待状づくりを全員で役割分担して進めた。担任からの報告によると，「助言などしなくても，子どもたちが自分たちで協力して準備を進めることができた。」，「どの子も，和気あいあいと楽しそうにできていた。」ということだった。

ドッジボール大会本番は，最初から最後まで子どもたちが中心になって進めることができていた。集会はけんかなく進み，とても盛り上がった。みんながボールを持てるように，配慮をしている子供の姿も見られた。

担任との振り返りでは，第３ステップ（表３）の学活を行うことができるようになってきたこと，荒れた状況は全くなく，普段の生活の中でも自主的に活動する子供たちの姿が見られるようになったことが挙げられた。

(４)結果

５年 X 組で学級会から学級集会までの一連の学活(1)を計５回行った結果，子供たちは荒れることなく落ち着いた学校生活を送るとができている。

①小学校生活に関する調査（長谷川ら，2013）（５件法）

小学校生活に関する調査（図５）により得られた結果について，ｔ検定を行った。（表４）分析の結果から，「わたしの学級では，学校行事や学級の活動で，学級目標やめあてを意識している（学活の実践）」の数値が有意に上昇しており，計画的な「子供に任せる」学活(1)の実践の積み重ねが数値の結果から分かる。

また，「けんか・もめごとがある」の項目について，５年生の数値が有意に下降していた。このことは，学活(1)の実践によって「けんかやもめごと」といった人間関係上のトラブルが改善されてきたと考えられる。更に，「困ったことは話合いで解決」「他の当番や係を助けた」「何でも言える」の項目について，数値が有意に上昇していた。

このことから，「けんかやトラブルなどのもめごと」といった人間関係上のトラブルが減少してきたのは，話合いで解決できるようになったこと，日々の学級生活や学級集会に向けての取組で協力でき

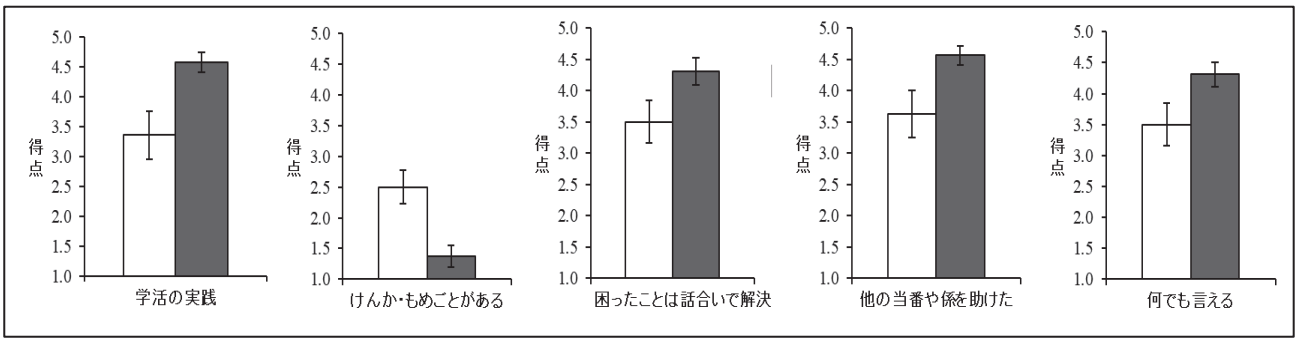

図５　小学校生活に関する調査（長谷川ら，2013）５年Ｘ組の結果

表４　ｔ検定の結果

項目	６月	１２月	df	ｔ検定 ｔ値	結果 p値	
学活の実践	３．６	４．６	16	２．７	0.018	＊
けんか・もめごとがある	２．５	１．４	16	４．３	0.001	＊
困ったことは話合いで解決	３．５	４．３	16	２．６	0.018	＊
他の当番や係を助けた	３．６	４．６	16	２．９	0.011	＊
何でも言える	３．５	４．３	16	２．５	0.022	＊

＊p＜0.05

たこと，お互いに何でも言い合える関係が育ってきたことが遠因となっていると考えられる。

②小学校生活に関する調査（長谷川ら，2013）の結果の裏付け

ア学級会・学級集会活動実践後の振り返りから

子供の振り返りや担任の感想では（表５），集会は子どもたちにとって楽しかったことが分かる。また，けんかなくできたことや，協力できたこと，絆が深まったことなどの感想も多く見られた。担任も，学級が良くなっていることや普段の生活での子供たちの仲のよさが向上したということを感じていると振り返っていた。

イ担任・担任外による観察から

校内生徒指導委員会（12 月）では，５年Ｘ組について，「学級会の実践により，子供たち同士が仲良くなってきているのを感じる」，「休み時間もみんなで遊ぶことが増えた」，「授業中もとても落ち着いている」，「子供たち同士のトラブルが減っているように感じる」などの報告が挙げられた。

ウＡ児の変容について

５年Ｘ組には，特別に配慮を要する児童（昨年トラブルが多く学級を飛び出していた）Ａ児がいる。Ａ児は第１回学級会開始当初，「参加したくない」と言って参加しなかった。しかし，第３回学級会の翌日，集会の役割分担の際に，Ａ児は「はじめの言葉」を担任に進められ，担当が決まった。それ以降，「はじめの言葉」を上手に言えるようにＡ児は練習を頑張った。集会当日，自分の役割を果たすと，みんなから拍手をもらって嬉しそうにしていた。集会は，けんかもなく進んだ。Ａ児は，最初遠慮しているようであったが，ドッジボールでボールを友達からまわしてもらうと，とても意欲的にボールを投げていた。周りの友達が，よくＡ児のことを気遣っていたことで，Ａ児も楽しく参加できたようであった。それ以降は，学活の授業に積極的に参加し，計画委員会の黒板書記に自ら立候補していたこともあった。

表５　子供の振り返り・担任の感想

子供たちの振り返りの内容

１　成功して良かった。
２　めちゃくちゃ楽しかった。学級会も楽しかった。（Ａ児）
３　もう一回やりたい。次はクリスマス会がしたい。
４　楽しいお楽しみ会が出来て良かったです。
５　絆が深まったと思います。
６　お楽しみ会ができるから，学校が楽しい。
７　とても楽しかった。
８　協力できていたことが良かった。
９　楽しかったです。またしたいです。
１０クリスマス会がしたいです。
１１緊張したけど計画委員会が楽しかった。
１２準備で，みんなけんかなくできていたのが良かった。
１３友達との絆が深まっていたと思います。
１４学級活動の時間が一番楽しいです。
１５たくさん楽しいことをしていきたいです。
１６楽しかったです。

担任の感想

学級会の実践を通して，学級が良くなっているのを感じる。休み時間にもケンカなく，また男女も仲良くよく遊んでいるようだ。次はクリスマス会がしたいと，すでに子供たちは話をしているようである。

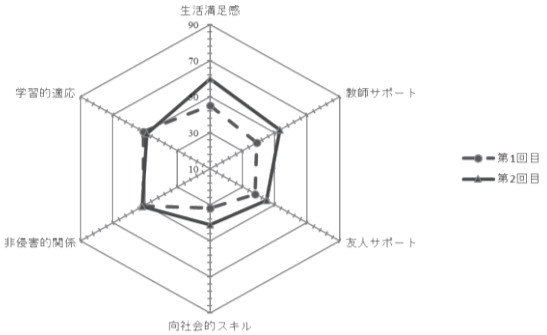

図６　A 児の ASSESS の結果

このような学級集会の経験を経て，A 児は，課題であったトラブルがほとんどなくなり，友達と楽しく過ごすことができている。学校環境適応感尺度 ASSESS の結果（図６）を見ると，１回目（６月）と２回目（12 月）の調査結果の比較から，教師サポートが 39 から 53，友人サポートが 38 から 45，向社会的スキル 32 から 41 と上昇が見られた。

A 児は，最初のお楽しみ会の感想で，「はじめの言葉を言うのが緊張したけれど，出来て良かった。楽しかった」と振り返りを話していた。

担任の報告では，「最初のお楽しみ会以降 A 児が少しずつ落ち着き，友達とも仲良く遊べるようになった。A 児は，教科の授業にもよく頑張る姿が見られているし，トラブルもほとんどない。この取組みを続けていきたい。」と担任は話していた。

3　総合考察

本研究に取り組んできた結果，昨年度起こった「荒れ」の状況は見られず学級全体が非常に落ち着いてきている。

このような結果になったのは，人間関係上のトラブルから暴力や暴言などの問題行動に発展し，教師による仲裁を得なければ問題を解決することができなかった子供たちが，学活(1)の学級会での経験を通して，トラブルを自分たちで話合うことによって解決することができるようになったり，お互いに何でも言い合える関係になったりしたからだと考える。このことは，宮坂（1968）が，「子供たちが質の高い民主的な集団を築き上げていくことが，高い規範意識と集団意思を持った集団をつくり，そのような集団のもとで，よりよい個の成長も促進する。」と述べていることと関連が深い。

また，学活(1)の取組を通して，子供同士が協力したり助け合ったりしたことで，困っている友達に目を向け手を差し伸べる温かい学級集団が作られ，友達と支えあう人間関係が形成されてきたと考えられる。このことは，ザンダー.A(1996)が「集団を構成している成員が同一の目標に向かって行動するとき，多くの成員が仲間の行動を助けようとする。そのことが成員間の強調につながる。」と述べていることや，狩野・田﨑(1990)が「子供に任せる学活(1)の実践によって，子供たちに相互依存関係や相互作用が生まれ，学級集団が高まる」と述べていることと関連が深い。

更に，上記の A 児が学級の友達から受け入れられ学級適応が促進したことについては，白松(2017)が，「特別活動の実践において，気がかりな子（しんどい子，苦しい子，難しい子など）を包摂するインクルージョンが促進する」と述べていることと関連が深い。

このことから，在籍校に見られた学校の「荒れ」を解決し，子供たちの学校適応を高めていく学級経営を行っていくためには，以下のような指導の在り方が重要であると考える。まず児童に統一した指導を行う「教師の揃える指導」によって規律ある生活の基盤を整えることである。そしてその基盤の上に，「子供に任せる活動」として子供たち自身が学校生活や学級づくりに対する思いや願いを話合い，みんなで決めたことを全員で役割分担をして実現していく自発的・自治的活動を中心にした学活(1)を行うことである。これらの「学級経営の３領域」の指導を充実させる取組が，子供たちの心を満たしよりよい学級・学校を作っていくための高い規範意識や意欲を育てていくのだと考える。

今後は，学級内の人間関係から生じる問題にも気づき，解決のために話合い，協力して実践する子供たちを育成していきたい。

引用・参考文献

平田裕美　2019「中学生・高校生の偏食傾向とストレスマネジメント，学校生活満足度との関連」日本学校心学会第 21 回報告
長谷川祐介・太田佳光・白松賢・久保田真功　2013「小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果」『日本特別活動学会紀要』第 21 号抜粋
狩野素朗・田﨑敏昭 1990『学級集団理解の社会心理学』ナカニシヤ出版
宮坂哲文　1968『宮坂哲文著作集Ⅰ』第１巻，p. 106
太田佳光　2001「特別活動と学級経営」相原次男他編著『個性をひらく特別活動』ミネルヴァ書房 179～190 頁
下村哲夫・天笠茂・成田國英　1994『学級経営の基礎・基本（学級経営実践講座１）』　ぎょうせい
白松　賢　2014「授業／学級づくりに関する教育方法学的研究(1)」『愛媛大学教育学部紀要』第 61 巻 74 頁
脇田哲郎　2013「特別活動を核とした学校経営」佐々木正昭編著『入門特別活動』学事出版株式会社 p. 143
ザンダー.A　1996 黒川正流ほか訳『集団を活かす−グループ・ダイナミックスの実践−』北大路書房 p. 93